

奥州市胆沢区で、和牛の繁殖、肥育の一貫経営をしておられる藤田栄氏（JAふるさと肉牛部会長）の農場を、同じ胆沢区の繁殖農家、福田喜氏の紹介と案内をいただき訪問させていただきました（平成28年12月18日）。

牛肉生産は、繁殖と肥育に分かれます。繁殖は繁殖農家による子牛の生産を指します。子牛は繁殖農家によって10ヶ月育てられ、その後、子牛市場で取引され、肥育農家に渡ります。肥育農家はさらに20～26ヶ月かけて牛を大きくし、体重800kgを超える成牛として市場に出します。

繁殖と肥育は、それぞれを専門とする農家に分かれていることが一般的ですが、繁殖と肥育を一貫して行う畜産農家、農場も少なくありません。

今、牛の市場は湧き上がっています。和牛を中心に子牛価格が高騰し、さらに、牛肉価格も高値を続けています。根底にある最大の理由は、子牛の供給数が落ちており、和牛の数が減ってきていることにあります。

繁殖農家は、家族経営が主体で、経営者の多くは高齢化しています。かつ、後継者がいない農家が多数を占めています。もっとも、高齢化と後継者不足は、一次産業全体に見られる傾向です。しかし、米などの土地利用型農業については、担い手農家に離農する農家の農地を集積して、地域としての生産を維持することに成果があがっています。酪農も農家戸数の減少の一方で、一戸あたりの飼育頭数が確実に増えてきています。繁殖農家は、高齢化のさらなる進展によって、農家数の急激な減少が目前に迫っている中、それに対応した規模拡大や、新規就農の展望が開けているとはいえません。

子牛不足に対応する手段として、和牛の受精卵をホルスタインに移植して、酪農家が和牛を生産することも広がっています。しかし、これは、ホルスタイン牛の生産に支障が出てくることにつながってきます。事実、ホルスタインの価格も上がっており、増頭による規模拡大をめざす酪農家の大きな足かせになっています。生乳生産にも影響がでかねません。

和牛繁殖の担い手をどう確保するか、規模拡大をどう進めていくか、早急な対策が必要です。JA、自治体一体となった取り組みが必要です。この問題には私も真剣に取り組んで参りたいとおもっています。

【写真1】

畜舎は、藤田栄氏（写真右）ご自身の設計で、木材をふんだんに使った作りになっています。わらは、ご家族が生産したものです。真ん中は福田喜氏。



【写真2】

肥育中の和牛です。肥育期間を終えると奥州牛として東京の芝に出します。A4、A5（最高級ランク）以外ありません。輸入牛肉の影響はない、と断言されています。



【写真3】
3人で懇談

